

平成28年度第2回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成28年11月15日（火）午後1時30分から午後3時30分まで
- 2 場 所 愛知県庁本庁舎 正庁
- 3 テーマ 国際的なスポーツ大会による地域振興
—あいちからスポーツの感動を世界へ—
- 4 意見交換者（五十音順、敬称略）

イレーネ	ラジオDJ・タレント
坂本 周次	レジックスポーツ 代表取締役
進藤 剛	愛知県ラグビーフットボール協会 理事・広報委員長
高橋 繁浩	中京大学スポーツ科学部長
中村 直志	株式会社名古屋グランパスエイト
政田 盛拓	フットサルミニワールドカップ実行委員会 代表
邨瀬 隆治	中日新聞社 事業局スポーツ事業部長

【知事】 皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。本日は、お忙しい中、知事と語る会ということでご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

この知事と語る会は、年に3回、毎回テーマを変えて開催しておりまして、こういう形で2時間程度皆さんと意見交換をさせていただくということで、インターネットのライブの配信も、私になってからやらせていただいておりますので、よろしく願いを申し上げます。

さて、今日のテーマは、「国際的なスポーツ大会による地域振興」ということで、それぞれのスポーツのジャンル、分野でご活躍をいただいている、またご尽力をいただいている皆様に今日はお越しをいただいて、さまざまなご意見をいただければと、率直にご意見をいただければありがたいということでございます。

私ども愛知県では、できるだけ国内外に発信できるスポーツ大会を誘致し、そして育て、盛り上げていきたいと思っておりますし、市民スポーツも盛り上げていきたいと思っております。そういう中で、大きなものとしては、毎年3月にはマラソンフェスティバルナゴヤ・愛知がありますし、秋には、先週でございましたが、新城ラリーというラリーの日本最大のレースが、これは、豊田章男社長も自分で運転するというので大変話題を呼んでおります

が、そういったこととか、また、アイアンマン70.3セントレア知多半島ジャパンというのもありますし、さまざまなそういった大会がたくさんございます。もちろん、野球のドラゴンズ、それからグランパス、それからラグビーもワールドカップがこれからありますので、トヨタ自動車、豊田自動織機はじめございますし、バレーボールもバスケットボールも、ありとあらゆるスポーツでやっぱり大変盛り上がっているように思います。

また、今年オリンピックイヤーでありましたし、坂本さんがヘッドコーチを務められた女子体操も大活躍していただいて、すばらしかったと思います。寺本選手、2大会連続で、今度は主将としてご活躍いただいたし、本当に盛り上げていただけたかなというように思いますし、高橋さんは水泳のまさに日本を代表する選手でありまして、日本を代表する指導者でもあられますし、リオも行かれて解説されたんですよね。本当にご活躍をいただきました。そういう意味で、今年オリンピック、愛知県選手は大変、日本人選手団が338人でしたけれども、愛知県ゆかりの選手が37人出て、1割以上。女子レスリングのメダルラッシュをはじめ、メダルをとった方とか入賞された方がいっぱいまして、すばらしいことで、明日またそれは表彰させていただくんですけれども、大変よかったなと思います。

ドラゴンズとグランパスのことはあえて言いません。これ以上今日は言いませんが、また後ほど言ういただければと思います。

そういう中で、これからのスケジュールを申し上げますと、来年4月に日本水泳をやるんですね、名古屋のレインボープールでありますし、それから、10月はヨット、セーリングのワールドカップ。世界で5地区を転戦する形に来年からなるんですけど、アジアで唯一蒲郡で、日本で初めてワールドカップをやるということでございますし、また、12月にはフィギュアスケートのグランプリファイナルを名古屋でやるんです、ガイシホールで。これは盛り上がると思いますよ。ソチ・オリンピックの2カ月前の最終で最大の大会のグランプリファイナルですから。個人的には、そこに真央ちゃんがいるといいなと思っていますけれども、それはそれで。そして、2018年はスペシャルオリンピックの日本大会をやります。これは9月。そして、2019年はラグビーワールドカップを、これは9月から10月ですね。そして、2020年が東京オリンピック・パラリンピック。あわせて、フットサルワールドカップを2020年に誘致したいということで、最終のノミネートで今やっているところでございます。そして、2026年にアジア競技大会、愛知・名古屋の開催が決定をいたしました。

などなど、これから10年にわたってさまざまな大会で盛り上げていきたいというように思っております。やはりスポーツは理屈抜きで多くの人を感動させると思います。そういった人を感動させるイベント、スポーツをもっともっと盛り上げていきたいと思ひますし、多くの日本の国民や、日本の方だけじゃなくて国内外の方に感動していただけるような、感動を与えられるような、そういう地域というか、そういう愛知でありたいなと思ひますので、何とぞよろしくお願ひいたしたいと思ひます。

今日は限られた時間でありますけれども、皆様から忌憚のないご意見をいただき、また私どもの施策に活かしていければと思ひますので、何とぞよろしくお願ひを申し上げます。どうもありがとうございました。

それでは、順番にお話をお願ひしたいと思ひます。まず、坂本さんからお願ひいたします。

【坂本】 レジックスポーツの坂本です。よろしくお願ひいたします。

夢、希望、感動という、スポーツは人々にそういった感動を与えるものだと思います。私は一昨日、62歳になりまして、四十何年間、体操の指導に没頭いたしまして、昨年、イギリスのグラスゴーで行われました世界選手権大会の女子体操のヘッドコーチに初めて就任して、そのときは団体5位で、今年、リオのオリンピックではチームのヘッドコーチとなりまして、初めてのオリンピックのヘッドコーチだったんですけれども、そのときに団体4位、これは48年ぶり。私の教えるレジックスポーツ所属で中京大学所属の寺本明日香選手が地元愛知から世界へということで、個人総合8位。これは、52年ぶり、前の東京オリンピックで池田敬子先生がとった6位入賞に次ぐ記録であるということの後で聞いて、私はすごいことをやっちゃったんだなと。帰ってきましたら、やはりすごいことをやったぞということ、体操関係者だけじゃなくて親族、また、昔の友達からもすごいたくさんメールをいただいたり、手紙をもらったり、表彰されたり、いろんなことが起こってしまったんですけれども、いろんな方がこんなに感動してくれたんだなというふうに思いました。

そのスポーツが2020年の東京オリンピックで行われる、そしてまた、2026年には愛知でアジア競技大会が行われる。そうした中で、やはり県民の皆様がスポーツに対する関心をまず持っていただかなかつたら、応援しようにも応援のしようがないんじゃないかなというように思ひます。ですから、県として、こんなにたくさんのスポーツの優秀選手、コー

ち、施設があるんだよということを発信していただきたいなど。

次には、その人たちが自分から、ジョギングをするでありますとか、シティーマラソンに参加するでありますとか、バレー教室だとかいろんなスポーツ教室に、フィットネスでもいいし、参加していただくと。スポーツに関心を持った上で、その愛知県出身者である選手が活動する姿を見て、応援をして感動するという。最終的には感動していただきたいと思うわけなんですけれども、そのためには、現在の活躍している選手、そしてコーチ、所属するそういう競技団体を表彰したり、支援をしたりしていただきたいなというように感じます。

次に、育成支援ですけれども、2020年の東京五輪、2026年のアジア競技大会の競技種目が決定されていくと思いますけれども、その競技種目を中心に、愛知選抜選手というようなものを認定して、その特別な能力を持っている選手、特に在住している選手については支援をしていったらどうだろうと。義務教育は小中学生までですので、高校から大学、早い子は中学生ぐらいで、個の能力を活かすために強いチーム、強いコーチ、優秀なコーチのいるところに移籍してしまう、県を離れてしまうということが起こるんですけれども、早いうちからそういう子供たちに、愛知県に在住して、しかも世界へ行ってくれるために私たちは応援もするし支援もするんだよ、というようなことが非常に大切じゃないのかなと思います。

このスライドに映っている土橋選手は、リオ・オリンピック閉会式の次の東京大会をアピールするセレモニーで、渋谷の交差点で大ジャンプをして、こんなに私は若いんですけども、次の東京オリンピックには私が出たいんだというようなアピールをした選手なんですけれども、もう既にアジアジュニア大会で団体優勝をしております。

(次のスライドを示して) これは高校選抜、これはリオ・オリンピックで私たちが体操団体を戦ったときの写真で、これが団体4位になったメンバーですね。ちょっとポーズをとったりして。上から4番目に日本が入ったんですけれども、中国と最後まで接戦して、あと1.7あればメダルがとれたんだぞ、みたいなどころまで行って、非常にわかりやすく日本の皆さんも、すごく近いところにいるんだね、と。東京ではぜひ体操女子も応援しなきゃいけないねというようなことを感じられたんじゃないかなと思います。そうしたことを、県民スポーツの関心を持っていただくためには、県それから市町村に、こんなすばらしい選手がこんな活動をしているんだということをテレビでありますとか地方新聞等にも呼びかけて、ますますそういう広報をしていただきたいということを感じるところでございま

す。

以上でございます。

【知事】 ありがとうございます。それでは、また後ほどよろしく願いいたします。

それでは、高橋さん、お願いいたします。

【高橋】 中京大学の高橋です。本日は、こうして語る会にご参加をさせていただきましてありがとうございます。

早速本題に入っていきたいと思いますが、まず、スポーツ、今、坂本先生が、感動させる、知事も感動させるような愛知、というお話がございました。もちろんそうなのですが、もうちょっとレベルを下げるかもしれませんが、心身を健康にすること、これは当然のことなんです。ただ、この当然のことがとても私は大切だと思っております。つまり、心身を健康にすることによって、これが地域の活性の、やっぱり元気の源になっているものだというように思っております。

まず、これから数多くの国際大会がたくさん開催されるということなのですが、今、坂本先生からお話がありましたが、ぜひ広報をと。やはりまず私も、国際大会がせっかくあって、どれぐらい来てくれたかなと言う前に、こんな大会があるんですよというような、スポーツの魅力というものをしっかりアピールする必要があると思っております。例えば、私も水泳出身なのですが、もちろん水泳のことはよく知っています。あるいは、野球やサッカーやメジャーな種目のことはよく知っているんですが、じゃ、全ての種目をよく知っているかという、そういうわけではない。まさにそのルールを知らないというようなこともよくあるんですね。

従って、例えばスポーツ観戦を楽しむためのポイントとして、いろんなイベントであるとか、ルールブックにしても、単に文字が書いてあるのっておもしろくないんです。漫画だとかイラストだとか、何か子供たちが興味を持つような、そんなアピールの仕方をしていただくというのも1つだと思いますし、また、2026年のアジア競技大会ということであれば、当然そのときのキャラクターがあるんだと思いますが、そういったものをできるだけ、いち早く県民の人たちの目に触れるような、そんな広報活動等、あるいは応援グッズ云々というようなところにつなげてもらえると、その関心度が高まっていくのではないかなというように思っています。

また、徐々に施設も整備されていくと思いますが、スポーツ施設、ここで国際大会が行われて、すごい選手がプレーするんだよ、というようなところを、ぜひいろんな人たちに

も開放してあげてもらいたいなど。もちろん、東京オリンピック、ほかの近隣のアジア諸国でも大きな大会がありますと、合宿地ということで、いろんな国の選手たちがやってくるケースもございます。既に積極的な誘致はされているわけなんですけど、事前の合宿誘致、あるいはそれに備えて、10年後、あるいはその前の国際大会にも備えて、やっぱり通訳、観光案内のボランティアの育成、そして実践というのもまちづくりにつながっていくと思っています。

また、中学生、高校生、大学生が参加していくことによって、その大会のことをよく知るようになる。例えば、国際大会の観客動員についてですが、今日、大村知事と語る会に参加するために、私は少し授業を短目に切り上げて、学生たちに、行ってくるぞと。その前に、「2026年ってどんな大会があるか知っているか？」と聞いたときに、残念ながら、「先生、何があるの？」と。こんなような話をしてきました。アジア大会というビッグな大会がこの愛知・名古屋であるんだよということを、残念ながら知らない学生が多かったというのが今の印象です。

観客動員で、すごく印象にあるのが、アジア競技大会とかではないんですが、水泳の世界選手権が、パース・オーストラリアであったときに、平日の昼間に子供たちがいっぱい会場にいるんです。お母さんたちもいっぱいいるんです。何でかという、水泳の競技というのは、予選が終わって、昼を挟んで決勝があるんですが、予選が終わった途端にその子供たちが一斉に水着になって、そのプールに降りてくるんです。そして、コーチが時計を1つだけ持って、リレーを4人でやるんですね。正式な大会ではないんですが、子供たちは、今さっき選手が泳いでいたプールで泳ぎたくてしょうがない、と。そして、それを昼間のまだお客さんの少ない午前中の時間帯に集めて、というような工夫をしていました。これは観客を埋めるということだけではなくて、本当に子供たちがすごく関心を持ってくれたんだろうなというように思いました。ぜひアジア競技大会、そういうときには、学校を休校にしてくださいとは言いませんが、夏休みに補講しておいて、その時間はぜひそういう競技に触れると。いろいろと試合に行ったらポイントがもらえるような、そんな観戦手帳を作るとかというのも1つの作戦かなというように思っています。

それともう1つ。昨日もフィギュアスケートが終わってからアイスショーをやっていたけれども、競技だけではなくて、そういったものを見ること、競技場に行くことがすごく楽しいというようなイベントを開催する。高価なものもあるかもしれませんが、そうではない形でも、私は十分その機会にいろんなことをアピールできるのではないかな、と

いうように思っています。つまり、スポーツファンをぜひ増やしていただきたい。ファンというのは、するだけじゃなくて、見るもよし、応援もよしということです。

大切なのは、そこからどう続くかということになるんですが、とにかく造ったスポーツ施設を大いに利用していただきたいと。これもかつて私がインパクトを受けたものですが、2000年のシドニー・オリンピック前にオーストラリアのタスマニア島というところに行っただんですが、そこにスポーツクラブ、施設がありまして、朝の5時から夜中の12時までこうこうと明かりがついていて、すごく人がたくさんおりました。ぜひこういった機会を利用して、いろんな人がスポーツに参加できると。つまり、それが県民の人たちの体力の向上、あるいは、とにかく医療費の抑制、競技力の向上、活発な社会、経済効果、つまり元気な愛知をつくっていくものだというふうに思っていますし、ぜひそのような機会にしていいただきたいというふうに思っております。

以上です。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。また後ほどよろしくお願いします。

それでは、政田さん、よろしく申し上げます。

【政田】 フットサルミニワールドカップ実行委員会代表の政田と申します。皆さん、よろしく申し上げます。

さて、私なんですけど、会社員をやりながら、名古屋フットサルミニワールドカップという大会を立ち上げて運営をしています。まず、名古屋フットサルミニワールドカップって何だと思われる方が多いと思うんですが、東海地区で暮らす外国人、日本人が交流を深めるフットサルの大会です。20カ国以上の国籍を持つアマチュア選手たちがテバオーシャンアリーナというフットサル専用スタジアムに集まって、みんなで熱戦を繰り広げました。これは今年の9月の模様なんですけど、例えば中国とか韓国とかペルー、ブラジルの領事館から副総領事とか領事も来賓として来てくださっているんですが、大村知事も来てくださって、PKを開会式でやってくださいました。見事右隅に決めて大変盛り上がりました。その節はありがとうございました。

(スライドを示して) これが試合の模様です。ワールドカップと同じように、国別で基本的に対抗試合をやっています。20チームでアマチュアなんですけど、ガチンコでみんなやっています。ここから派生して活動の幅が広がって、中国の忘年会に呼んでもらったりとか、韓国のジュニアフットサル大会に呼んでもらったりとか、イスラム教のモスクの開所式、それからブラジル人学校での講義とか、今は活動の幅が広がってきています。

そもそも社員の私が何でこんなことをやっているんだと疑問に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、単純にもったいないと思っているからです。グローバル化がこれだけの規模で世界中で進んでいる中で、日本を見てみると、まだ国際交流ってなかなか身近なものになっていない。一方で、外国人って近くにいるんですよ、たくさん。特に愛知県って、人口比率の外国人の比率が全国で2番目に多い。東京の次です。それを考えたときに、もったいないなど。こうやって外国人のほうを見てみると、外国人は外国人で自分たちのコミュニティーにこもりがちになっちゃっている。ある意味、コミュニティーが分かれているんですね。分かれてしまっているコミュニティーを結びつける力がスポーツにはあるんじゃないかなと。国境とか国籍とかそういったものを越えて、僕らがお互いをわかり合う、そんな機会をつくる、スポーツにはそんな力があるんじゃないかと私は思って、この大会を立ち上げて運営しています。

そんな私が、今日のテーマ、国際的なスポーツと地域振興なんですけど、言わせてもらおうとしたら、こんな感じです。未来に種をまく大会にしていだけないかなと、していきたいなと思っています。もちろん、大村知事をはじめ愛知県庁の方々もたくさん考えてくださって、アクションを起こしてくださっている中で大変せんえつなんですけど、私の視点から見ると、こんな感じなのかなと。

国際的な大会っていろんなメリットがあると思うんですよ。先ほど出てきたような感動を与えるだとか、経済効果とかいろいろあると思うんですけど、私の視点は、いろんな国の人に来ることです。たくさん国の人が一遍に来ます。ということで、その視点から、世界、多様性を感じる機会を積極的に創出する。地域住民参加型にする。先ほど、高橋先生からもちょっとあったんですけど、中高生とかそういう方々を中心に、ボランティアをもっともっと積極的に促していく。さらに、こういった活動の起爆剤に大会自体がなっていけばいいなと思っています。

例えば、中高生を中心としたボランティアスタッフの公募。これも例えば中高生の方がたどたどしい言葉で、その国の言葉で街を案内する。そうすると、自分の語学に対してもいろいろ感じるでしょうし、何より街の紹介をするわけですから、自分の街に誇りを持つかもしれない。いろいろ地域が活性化するものになるんじゃないかなというのがまず1点目です。

2つ目が、外国人選手等が学校に訪問したりだとか、あとは練習試合、これは例えば新潟県の十日町なんかで大成功、クロアチアと十日町の交流とかがあったように、こんなの

ができれば、子供の心にはものすごい残るんじゃないのかなと。それから、少年少女大会の試合を本大会の前座で行う、これもものすごく心に残るものじゃないのかなと。それから、会場内に、ただ見るだけじゃもったいないので、食べて味わうということで、各国料理の屋台を出店して、その国の料理も味わっちゃう。

あとは、会場内に語学ブースを設ける。例えばスペインのチームが出てきたら、3分間スペイン語講座みたいなものを設けて、そこで応援にまつわるスペイン語を教わると、スペイン語をその場で使って応援できますよね。そうしたら、選手たちも多分テンションが上がるでしょうし、もしかしたら日本のことを好きになってくれるかもしれない。さらに、話している人たちも刺激を受けて、外国人を見たら英語を話しがちな日本人ですけど、ほかの国、ほかの言語があるという刺激も受けられます。

最後はボランティア、これの総括大会を行政と一緒にできたらなど。ボランティアをやっている人たちって、なかなか客観的に見る場ってなかなかないんですが、そういったことをお互いに喚起し合う場。さらに、横のつながりも連携も出てきますし、行政とのネットワークも出てくる。これが先ほどの話にあったように、2019年、2020年、2026年と、いろんな国際大会が愛知県は控えています。これで、2019年でもものすごい盛り上がって、2020年、2026年と、どんどんステップアップして、愛知県に根づく活動にできるんじゃないかなと、こういったものの積み重ねなんじゃないかなと思っています。

最後に、先ほどから僕はいろいろ子供たちとか若者たちと言っていましたけど、何で若者にこだわるのかといいますと、もちろん未来の社会というか地域社会を担うのは若者であるというのは間違いないと思うんですが、実は私自身が個人的な体験で、小学生のときに国際交流の体験を通じて、世界を知りたいと思うきっかけがあったんですね。そこから大学では国際政治経済を学んで、こうやって海外の営業だとか海外の工場を見るような仕事につきたいと思って、今のようなこういうフットサルの大会を立ち上げる、こんなこともやるようになっていきます。僕がいいか悪いかというのは別としておいて、僕にとってはすごく貴重な体験だったんですよ。

一連のこれからの国際大会というのは、若い世代にとって財産となるような、そういった体験をつくるすごくいいきっかけになるんじゃないかなと思っています。何が言いたいかというと、大会を今の僕らのものだけにするんじゃなくて、未来の世代のものにする、そういった大会にみんなですていけたらなと思っています。僕もそういったことをちょっとでも協力できたらなと思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。また後ほどよろしく願いいたします。

それでは、イレーネさん、お願いいたします。

【イレーネ】 イレーネと申します。普段はラジオDJであるとかアナウンスであるとか司会とかをさせていただいております。今日は第一人者の皆様の中で、私なんかでいいのかと何度も確認させていただきまして、すごく恐縮しているんですけども、私の視点からお話しさせていただきたいと思います。

私の役割といたら、大会の中では参加者とスポーツをつなぐ橋渡し、説明していく橋渡しの役割、あるいは選手と観客をつなぐ、そういう役割を担っているのかなと思います。この数年は、大村知事のお話にありましたように、マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知の、ナゴヤドームの中で世界的なスポーツブランドの企業ブースで何年にもわたって司会をしたりとか、あるいは、国際的なスポーツの大会で英語のナレーションをするということも頻繁にやっているんですけども、まず、ウィメンズマラソンの企業ブースでの司会からいきますと、年を追うごとに、どんどんどんどん海外からの参加者が増えてきているというのを肌で実感しています。

特にアジア圏の参加者、一般の参加者が、おそらく団体で、グループで来ているのかな、ツアーで来ているのかなというように想像していますけれども。困っているところがあるんだろうなと思っていたら、さっき政田さんがおっしゃったように、スポーツになると言葉は関係ないんですね。皆さん1つの目標を持って名古屋に来ていらっしゃるということで、本当に楽しそうにされていて、ましてや、マラソンフェスティバルの中では、世界的に有名なブランドのブースもたくさんあるということで、そういう点でも安心して参加されるという方も結構多いのかなと思います。皆さんがマラソンという1つの共通言語をしゃべりながら参加されているので、個人的には、本当にいいなと、個人レベルでは小さな困っていることはたくさんあるとは思いますが、やっぱり1つの目標を持ってゴールを目指す、このエリアは市民レベルではすごくいいことをやっているんだな、うれしいなと単純に思っているところです。

それを見たことがきっかけで、初めて司会をしたその翌年は私もフルマラソンにエントリーしまして、ウィメンズマラソンを走るところまでいきました。今日の意見交換者は男性ばかりですから、あれは女の特権で、いいでしょう？と思うところではあります。

その一方で、市民参加ではない、一般参加ではない特殊なスポーツと申しますか、選ば

れた選手が参加する大会の英語の司会、アナウンスをするということもよくありますが、そういったときにはよく困ったことがあります。それは何かというと、例えば、英語の台本であるとかを共有できる人がいないということなんですね。自己責任で全てを進めないといけなことが本当に多くて、本来であれば、これはこの読み方で大丈夫とか、このルールの説明はこれで合っているとか、逐一確認しながら進めたいところ、急な対処も多い場所ですから、全部自己判断でやるということが大変多くて、英語でやるからには、きちんと安心してやりたいなと思うところが大いにあったりします。別に国際大会だからといって、完璧な英語であるとか、英語を使わなければいけないというのはないのだと思いますが、やるからには、きちんとしたチームを持って、みんなで共有し合っていきたいと思いますし、先ほど皆さんおっしゃっているように、ボランティアのみんなにも共通して育成をしていくことができたらいいなかなと思ったりしています。

スポーツから少し離れてしまいますけれども、私は、特に奥三河地方の愛知県のお祭りに行ったり、地域の文化を楽しみに行くというのをライフワークにしています。そういった際に、よく海外の方にもお会いするんですけども、奥三河の花祭りなど、地元の人もよく来た、と迎えてくださるんですが、海外の人が、「これ、いいね。」と言ったものを、地元の人が、「そうなの？知らなかった」、「こんなの普通にあるし、何がいいのかわからない」とびっくりされることが本当によくあります。愛知県はよくミーハーと言われてたりしますが、人がいいと言ったものを、そうなんだ、いいんだというふうによくポジティブに捉えることができるのも愛知県民のよさだと思いますので、そういう海外の人が見て、「これ、いいよ」、「もっと出したほうがいいよ」というようなものをスポーツ大会にもぜひ取り入れていただいたらいいんじゃないかなと思っております。

とりあえずこんなところでしょうか。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。また後ほどよろしく願いいたします。

それでは、中村さん、よろしく願いいたします。

【中村】 名古屋グランパスの中村と申します。よろしく願いいたします。

まずは、今シーズン、J2に落ちてしまって、皆さんにご心配をおかけしまして、本当に申し訳なく思います。来年は確実にJ1に1年で戻れるように、一生懸命やって戻りたいと思いますので、皆さん、応援をお願いします。

私は14年間グランパス1チームでプレーしまして、2年前に引退して、今はフロントに入って、社員としていろんなファンの方をつくる活動をしているんですけども、選手の

ときは、大会だとかでいろんな競技場、本当に大きい競技場や、海外にも行かせていただきました。日本代表で海外に行ったこともありますし、グランパスでアジアチャンピオンズリーグなどで海外のかなり大きいスタジアムでプレーさせていただいたんですけれども、その競技場ができて背景というのはサッカー選手は全くわからず、ただ連れていかれて、プレーして帰ってくるという感じだったんですけれども、こういうお話をいただいて、どういう背景でスポーツスタジアムができていかなど、すごく考えるいい機会になりました。

行った先で、そこが日常的に使われていると感じられたことはなかなかなくて、結構周りも閑散としていて、普段どのように運営しているんだろうとか、そういうことをすごく感じました。ですので、こういうアジア競技大会などを開催する中で、常に市民の方、県民の方がその施設を有効に活用できるような仕組みだとか、そういうものを考えながら作っていただきたいなと思います。

今よく言われる“レガシー”という言葉であらわされていると思うんですけれども、ビッグイベントを通して、施設をうまく利用できる空間をつくっていただきたい。その中で、スポーツが好きでない層にアプローチできると思いますし、スポーツの価値を気づいてもらうすごいチャンスだと思います。大会そのものもすごく大事だとは思いますが、その過程で生まれる施設、インフラ整備だとかスポーツ文化、振興等、県民の暮らしにさまざまな好影響が出ることを、長期的にわたって考えていくことがすごく重要だと思いますので、そういう施設造りをしていただけたらなと思います。

その中で、グランパス側の立場から言わせていただきますと、サッカー場になるんでしょうか。サッカー場を活用するに当たって、持続して運営を可能にできるスポーツ施設の整備というのをすごくしていただきたいなと思います。その中で、グランパスの持っている選手、コーチ、マスコットだとか、そういうコンテンツを活かしていけたらなと思います。アジア競技大会に向けて、グランパスが持っているものをご協力させていただけたらなとすごく強く思います。

それを言う前に、まずはJ1に上がらなければいけないと思いますので、頑張りたいと思います。ありがとうございます。

【知事】 11月3日は私も瑞穂におりました。

【中村】 済みません。

【知事】 私は仕事がずーっとあったので、終わりの終わりの終わりの本当に終わりの

後半、豊田社長の隣が私の席で、最後の辺は豊田章男社長が、私にひたすら済みません、申し訳ありません、済みませんと十何回言われました。

【中村】 あれだけの満員の方が来てくれた中で、本当に申し訳ないんですけども、県民だとか市民の方は、注目したスポーツに関してはかなり来ていただけるというのはすごく感じましたので、その期待に応えられるように頑張りたいと思います。

【知事】 あんまり言うといけませんけど、正直言って、来年はなかなか厳しいシーズンだと思いますが、いろんな露出も減るしね。だけど、それは頑張ってください。

【中村】 頑張ります。

【知事】 今日はこの話がメインではないので、ちょっと置いておきますけど。

それでは、続きまして、進藤さん、よろしく願いいたします。

【進藤】 よろしく願いいたします。愛知県ラグビー協会の広報を担当しております進藤です。

私のほうからは、多分、各スポーツ団体さんも同じだと思うんですけども、3つのお話をさせていただきます。1つ目は、普通にラグビー協会でどういう広報の活動をしているか。2つ目は、地元でどういう広報をしているか。3番目は、ラグビーワールドカップに向けてこれから取り組むこと、これから愛知県さんともお願いしながら取り組んでいきたいことというような流れでお話をさせていただきます。

ラグビーでは、どんなスポーツでもありますがけれども、日本協会がラグビートップリーグ、大学ラグビー、高校ラグビーというところの面倒を見ています。特に大学選手権、ラグビートップリーグと、よくテレビ中継されるのが日本協会でございます。こちらがほぼ全国的なPRを担っておりまして、開催地で行われますトップリーグのトヨタ自動車ヴェルブリッツ、豊田自動織機シャトルズの試合の広報は愛知県協会で行っております。

ワールドカップについては、ラグビーワールドカップ2019組織委員会というのが東京にございまして、これが全国発信をしているんですけども、地元ではラグビーワールドカップ2019愛知・豊田開催支援委員会さんという、愛知県と豊田市で作る委員会でPRをしています。地元における広報は、日ごろのラグビートップリーグ、大学選手権等々は愛知県協会から、ワールドカップにつきましては、愛知・豊田開催支援委員会さんからということになっております。

愛知県協会としては、私は2011年のころから携わっておりますけれども、そのころトヨタヴェルブリッツさんと相談してやったのが、試合終了後にすぐ選手は帰っていたんです

けど、グリーティングということで、試合が終了した選手、普通はクールダウンしなきゃいけないんですけども、出口でお見送り・写真撮影というのを重ねております。多分この取組というのは、東京でも数チームやったというところはあるんですが、その当時ではかなり早い取組でした。

また、愛知県さんに広報大使がいるように、愛知県のラグビーフットボール協会広報大使として、名古屋市の地元アイドルのd e l aさんと豊田市の地元アイドルのS t a r ☆Tさんに活動してもらっております。

そのような中で、今年度は、スーパーラグビーに所属するチーターズがトヨタさんの関係で参りまして、南アフリカのチームでございますが、豊田スタジアムで試合をやったときに、ラグビーワールドカップ2019愛知・豊田開催支援委員会さんに盛り上げをしていただきました。また、知事、市長には日ごろからご協力賜っているというところですよ。

今日発表されましたが、ちょうどワールドカップ1,000日前ということで「TRY FOR ALL 1000日前イベント」を試合会場と隣接する広場で、トークショーだとか、広報大使のS t a r ☆Tのイベントだとか、B級グルメが食べられるイベントだとかというような形で参加をしていただけるようになっております。

今までそういう取組をしてきたというところなんですけど、愛知・豊田開催支援委員会さんとお話ししていた中で、1つ実現していただいたことがありまして、日ごろ、日本協会・トップリーグの試合では、スチューデントシートという形でスクール生の来場促進をしているんですけども、今回、12月17日の試合で、愛知県の小中高生に愛知・豊田開催支援委員会さんからラグビー無料チケットをプレゼントという形で、現在募集中なんですけれども、ラグビー競技をしない子供たちがこれを機にどれだけ見に来てもらえるか、体験してもらえるかという取組をすることができ、非常に感謝しております。

また、今後につきましても、そういった日ごろラグビーに携わらない方にラグビーを見てもらえる機会、体験してもらえる機会というのをぜひ愛知県協会としてもサポートさせていただきたいと思っておりますし、ぜひ近隣の三重県協会、岐阜県協会もございますので、リードをしていただくのはぜひ開催支援委員会さんをお願いしたいな、という部分はございますが、愛知県、岐阜県、三重県、実は東海ブロック大会ってラグビーの競技をやるところでは、それぞれいい競技場がありますので、この3県連携でぜひ新たなスポーツ観戦のお客様を募れるようなレガシーとなるような事業を企画していきたいなというふうに思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

【知事】 ありがとうございます。

私が若いころ、学生のころはやっぱりラグビーが一番の人気スポーツでありましたね。全日本大学選手権の決勝とか、国立で早明戦とか行ったよ、僕。

【進藤】 ありがとうございます。

【知事】 隣でサッカーをやっていたって、こっちは国立でラグビーの決勝戦は6万人入って、サッカーの天皇杯とかは入るけど、サッカーの試合なんかだったら1,000人入らないとか、そんな時代だったんです。それが今、全然入らなくなって。ですから、そういう意味では、またぜひ頑張っていたらというふうに思います。

【進藤】 よろしく願いいたします。

【知事】 そういうことでございますが、続きまして、最後に中日新聞社の邨瀬さん、お願いします。

【邨瀬】 中日新聞社の邨瀬でございます。

私どもは、今現在、名古屋ウィメンズマラソンと、そして豊田国際体操という2つの国際スポーツイベントを行っております。規模や楽しみ方はそれぞれ違ってはいるんですけども、いずれにしても、礎となる大会があって、長い歴史を重ねて現在に至っております。また、その2つの大会が地域振興にどのように現状役立っているのか、そして、これから可能性があるのかということをご参考までにご紹介させていただきたいと思っております。

ウィメンズマラソンの前身、皆さんは名古屋国際女子マラソンだというふうに思われるかもしれませんが、さらにその前、1980年、豊橋市で中日女子20キロロードレースという催し物がありました。これが第1回なんですね。佐々木七恵さんがちなみに優勝したんですが。それが2年後、名古屋に会場を移しまして、(スライドを示して)右のちょうどあれですよね、キャシー・トミーというアメリカの選手と増田明美さんが競っていますが、結果として3秒差で増田さんが敗れました。ただ、2人とも、当時の女子の20キロ、世界最高を出したという非常に思い出深い大会でございました。

84年になりますと、ロサンゼルス・オリンピックで初めて女子マラソンが正式競技になりました。それを受けて、名古屋も女子マラソン化させていただきました。ここはもう皆さんよくご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、山下佐知子さん、谷川真理さん、真木和さん、松野明美さんや浅井えり子さんといった、そういった方々が出場して、東京、大阪と並ぶ女子の3大マラソンの1つとして活躍してまいりました。一番の名古屋の全盛

期、名古屋国際女子マラソンの全盛期と言われるのが、高橋尚子さんが優勝したころですね。ご存じのように、尚子さんは2000年のシドニー・オリンピックで金メダルに輝き、女子の陸上競技選手として初めて国民栄誉賞を受けられたという方でした。

その後も、野口みずきさんや弘山さんといったスター選手が出てまいったんですが、ただ、こういった名古屋国際女子マラソンのような大会はエリートマラソンなんですね。選ばれた方、いわゆる非常に成績のいい方しか出ることができなかった。ただ、このころになってまいりますと、これは1984年から実は2010年まで続いたんですが、世の中健康ブームということで、東京マラソンに代表されますように、市民マラソンが非常に大きな影響を及ぼすようになってまいりました。そこで、名古屋も当然ですが市民マラソン化していこうという動きがあったんですが、既に東京の成功例もあります。そして、世界でいいますと、ロンドンやボストンなどファイブメジャーという大会もありますが、そういったところと果たしてどういう差別化ができるのだろうか。我々は差別化として何を考えたかという、女子マラソンをずっと長年やってきたわけですから、これを発展させた形でできないだろうか。そしてつくったのが、この名古屋ウィメンズマラソンです。エリートマラソンプラス女性だけのフルマラソン、世界でも類を見ない、女性だけを対象としたフルマラソン大会にしていこうということで、2012年にこの大会を始めさせていただきました。結果として、イレーネさんからもお話がありましたように、世界最大の女子マラソンということでギネスにも今登録をされております。

世の中、マラソンブームということで、フルマラソンはどんどんどんどん右肩上がりです。数は増えてきているんですけども、実は、(スライドを示して)これは完走者数のグラフです。青いところが男性、ピンクのところが女性です。大体女性が全体の2割程度でございます。ところが、これは全国での平均なんですけど、愛知県は実は44.6%、三重で29%、岐阜で29%、極めてこの東海3県が女子の完走率が高いんですね。この原因は、当然ですが、名古屋ウィメンズマラソンの完走率が担っているということです。今年の3月の大会は1万9,607人が参加して、完走者が97.5%、1万9,112人が完走するという非常に完走率の高いマラソンで、その中で、海外ランナーも3,000人近くが参加されております。

また、マラソンの特色として、ウィメンズとして世界最大の女子マラソンというだけじゃなくて、エキスポというものを同時開催しております。発着点のナゴヤドームを会場にして、健康、スポーツに関するあらゆる展示を行って、あるいは、メーカーさんの商品なんかもここで販売しているということをやっております。

このマラソン大会、どういう効果を出しているかという、まず、参加者には、楽しみたい、速くなりたい、あるいは健康になりたいというニーズがあります。我々主催者としては、地域の活性化をしたい、あるいは知名度を上げたいとか、当然ですが、参加者数もどんどん増やしたい、利益も上げたいということもありますが、その参加者、主催者の2つの目的を1つにしていく、それが我々のマラソン大会であります。

国際マラソン大会として、国際陸連のゴールドラベルを獲得しております。これは、こういう一流の大会、一流の選手が出る大会を目にすることで、地元の子たちが早く我々も未来に、こういう選手に肩を並べるようなアスリートになりたいんだという夢を抱かせることができます。また、地域としては、市民参加型、これはボランティアだけで、実は9,000人を超すボランティアに来ていただいています。先ほど、レガシーというお話がありましたが、実はこのボランティアも、愛・地球博で集まったボランティアさんが組織され、それが今のウィメンズマラソンでのボランティアにつながってきております。レガシーというと、皆さんはハードなものばかりだと思われるかもしれませんが、そうしたソフトのレガシーもあります。

また後ほど時間があればご説明させていただきますが、愛・地球博の医療スタッフが、これもまたウィメンズマラソンでの医療スタッフへとつながってきております。これはおそらく、ほかのマラソン大会よりもかなり充実した医療体制が組まれています。

そしてまた、マラソン大会を通じて、この愛知県の魅力をぜひ世界にアピールしていきたい。エキスポでは食の、あるいは観光のPRもさせていただきます。

これは副産物としてですが、名古屋ウィメンズマラソン、経済効果として100億円を超えるという試算が出ておりますので、こういった大会が地域の活性化につながっていることは一目瞭然だと思っております。

実はこの後、豊田国際体操の話もしようと思ったんですが、ちょっとお時間がございませんので、また後ほどさせていただきますが、体操も坂本先生が専門でございますので、簡単に1つだけいきます。

体操はマイナースポーツかと思われるんですが、2013年のバンダイさんがとったアンケートで、体操、実は2020年のオリンピックで見たいスポーツのナンバー4なんです。非常にまだまだ潜在能力、ポテンシャルを感じるかと思っておりますので、こういったことを活かしていただければなと思っております。

簡単でございますが、以上です。

【知事】 ありがとうございます。名古屋ウィメンズマラソン、毎年私もスターターをやらせていただいております。光栄でございます。

【邨瀬】 ありがとうございます。

【知事】 あそこ、車椅子マラソンをぜひと言ったのは私が言い出して、ただ、女性だけのアスリートに限ると、本当にいつも10人ぐらいなんです、日本で女性でということになると。それでも、やっぱり最初にまずホイールチェアマラソン、車椅子マラソンの方がスタートするという、その後、10分後にドンといくのが、国際大会としてはやっぱりそれは必須ではないかと思っていますので、ぜひこれからもやっていきたい。

さっきも言われましたが、ウィメンズマラソン、女性だけでということでギネスに載っているんですけども、やっぱり男の方も、俺たちも走りたいぞと、名古屋のまちを走らせろという声はたくさん来ますけれども、主催の中日新聞殿に私が相談したら、だめだと。男を走らせたならギネスにならないので、だめだと言われたんですけどね。

【邨瀬】 そればかりじゃないんですけども、やはり男性が走れるマラソンっていっぱいあるんですよね。世の中、男女それぞれ走れるマラソン、東京マラソンもそうですけれども、一緒になって走りますけれども、やはり男性向けにできているんでしょうかね。例えば、更衣室の大きさであったりとかトイレだったりとかというのも、やっぱり男性中心にできているんですよ。ウィメンズマラソンはトイレも、実は除菌効果のある便座を使ったりとか、あるいは芳香剤を入れたり、ロードコーンもピンクのものをたくさん使ったり、やはり女性が楽しく参加できるような工夫をさせていただいておりますので。

【知事】 確かにそれはおっしゃるとおりなんです、ご夫婦とかペアと一緒に走りたいという人がやっぱり想像以上に多いんですよ、結構。だけど、だめだと。よそで走れと言っているんですけど。

ちなみに、愛知県内でフルマラソンって、ほかにあと庄内川マラソンしかないんですね。

【邨瀬】 そうですね。昔は豊橋でフルマラソン、日比野賞というのをやっていましたけどね。

【知事】 やっぱり、結局人件費なんですね、警備の経費。あれがやたらお金がかかるので、やっぱりそれだけ費用が集められるかということですよ。ウィメンズマラソンはむちゃくちゃお金がかかるので、中日新聞のほうで頑張ってくださいまして、感謝いたします。

さて、1周目のお話をいただきましてありがとうございました。それでは、どなたから

でもということですが、まだ時間がありますので、さっき言い足りなかったことも含めて、それではまた、坂本監督からまたよろしくお願いします。

【坂本】 私は年に3回ぐらい、いろんな国に行ったりしているんですけど、日本人というのは、今は愛知県は日本で2番目に外国人が多いとさっきおっしゃいましたが、海外へ行くと全てが外国人なわけで、日本人の悪いところというのは、その人たちと握手したり、英語で話したり、ハグしたり、その国の生活になじめないというか。外国人と見るとちょっと敬遠してしまうようなところがあって、それがスポーツをやる上ではマイナスになることが多いんですね。

例えば、サブ会場とかで練習をするときでも、段違い平行棒の順番を決めたり、ワイヤーを上げたり、踏み切り板を出したり入れたりとか、そういうときにもやっぱり日本人というのは、どうぞどうぞとやってしまうんです。順番が来ているのに日本選手というのは、ぱっと中に入って行って外国人選手と仲よくできなかった時代が長くあったんですね。今はそういうことが少しずつなくなってきてはいるんですけど、それは日本人の体操選手が海外の選手と対等に戦えるような競技力を持ってきたからというものもあるんですけど、やっぱり仲間で、アメリカ人であったりドイツ人であったり、いろんな国の人とぱっとなじめるにはどうしたらいいかという、やはりそういう交流の場が日本にはちょっと少ないんじゃないかな、という。

大陸間だったら、いろんな国の人と国境を越えて日常的に交流会とか競技会とかもできるんでしょけど、日本は島国ということで、海外へ行かないとそういう交流会が持てなかったり、逆に海外から来てもらわないと、そういう交流会、一緒に試合をやったりする機会が少ないので。やはりそういう大会を増やしたり、合宿をしたりということも、愛知県のほうでもいろんな競技でやっておられると思うんですけど、国際交流を促進して、日本独自の強さというものを外国人と同じ位置で戦えるように。英語力も関係あると思うんですけど、なかなかぱっとしゃべれない、交流できない、一緒に競技できない、練習できないというようなことがあるんじゃないかなという、まだまだメジャーじゃないという感じがします。

【知事】 今は豊田国際ですけど、昔は中日国際、中日体操でした？ 中日カップ？

【邨瀬】 昔の中日カップですね。

【知事】 中日カップでずっとやっていましたよね。

【邨瀬】 やってました。

【知事】 愛知県体育館でね。

【邨瀬】 70年から35年間、愛知県でやりました。

【知事】 それで、今が豊田（国際体操）。

【邨瀬】 これで10年目になりますか。

【知事】 あれもたくさんお客さんが来ますよね。

【邨瀬】 はい。

【坂本】 豊田国際（の会場の収容人数）は2,000人ぐらいですか。

【邨瀬】 3,500人ぐらいですね。

【坂本】 日本ガイシだと8,000人ぐらい入っちゃうんですね。

【知事】 入りますね。

【坂本】 8,000人はなかなか埋まらないので、豊田国際は満員になるので、ちょうどいいんですよ。盛り上がるというか。

【知事】 そういった意味でも、そういった大会をまたぜひ盛り上げていただきますようよろしくお願いします。

オリンピックで見たいという、体操は4番目ですか。

【邨瀬】 ごめんなさい、関係者がそんなことじゃいけないんですが、意外だったと。

【知事】 いやいや、僕も。そんなことを言っちゃ。水泳が一番だったですもんね。

【高橋】 そうですね。多分、2013年あたりというのと、やっぱり北島選手とかが大分活躍していた。だから、今出ている萩野選手は、北島選手がやっぱり活躍している姿を見て、僕もあれぐらいの選手になりたいなと始めているので、彼らの目標って複数の金メダルなんですね。北島選手の時代は、やっぱりメダルが欲しいとか、金メダルがとれたらなおさらというところだったんですが。だから、子供たちというのはやっぱりそういうのを見て育っていきますので、やっぱり競技のレベルが高いと、最初から高いレベルで育っていつてくれるというのが、今水泳界でもうまく相乗効果が出ているなというふうに思いますね。

【知事】 オリンピックでメダルをいっぱいとれるようになったのは何年ぐらいからでした？

【高橋】 実際、2004年のアテネ大会ぐらいからなんですけど、水泳界の話をするとき、やっぱり改善されてきたのはここ20年ぐらいなのかなというふうには思いますね。やっぱりそれまではなかなか。でも、1つ世界の殻を破ると、多分プロ野球やサッカーの世界もそうですよね。メジャーリーグも、全然かなわなかった時代は、なかなか目指せなかったん

だけれども、野茂投手とか、あるいはサッカーで中田選手が出てくると、やっぱりみんな目指していくように。そういう刺激というのはものすごく大きいと思いますね。

【知事】 高橋さんが現役で20歳ぐらいのときは世界のトップレベルの選手だった。

【高橋】 僕の時代が弱かったものですから。

【知事】 高橋さんの他にいませんでしたよね、世界レベルの選手って。

【高橋】 僕の世代は、鈴木長官がちょうどソウル・オリンピックで金メダルをとってくれたのが1988年。僕はロスとソウルに出ているんですけども。

【知事】 でも、鈴木さんのほうがちょっと下ですよ。

【高橋】 ちょっと下ですね。だから、あのころは本当に岩崎選手が金メダルをとったりとかすると、コーチが何ていう話をするかという、本当にいい選手に出会えてよかったね、だったんです。だから、こんな原石はなかなか見つからないよ、なんです。でも、今のコーチや選手は、強化したらメダルがとれるし、強くなる子はたくさんいるという、そんな考え方ですね。

【知事】 なるほど。普通に金メダルをとれますもんね、今。

【高橋】 普通ではないんですけども、でも、本当に意識レベルはすごく高いですし、やっぱり競争があるというのはいいですよ。実際に今、日本水泳連盟の場合、例えば参加標準記録、あれは非常に厳しいんですよ。非常に厳しいんだけど、じゃ、何人選べるからって、そこまで救うのがいいのかという、やっぱりレベルが違うんですね。オリンピックに出られてうれしい、それで私の目標は達成しましたという子たちと、メダルをとるまでは、という子たちがやっぱりなかなか共存できない部分ってあるんですよ。もちろん、なかなかそこまでレベルが行かなかったときというのは、切れなかったんですが、徐々にオリンピックでなくて世界水泳とかで取り出して、このあたりで線を引いてもいいんじゃないかという土台ができて、それで今に至っていますね。

【知事】 それってやっぱり全国各地にスイミングスクールとかがいっぱいできて、あれでずっと底辺が広がったというのはやっぱり大きくありますか。

【高橋】 もちろんそうです。やはり一貫指導がきちっとできる体制を組まれたのが今の強化につながっているというのは間違いないですね。

【知事】 学校のプール以外に、今みんな子供たちは必ずどこかのスイミングスクール、小学校のとき、何度か行きますもんね。

【高橋】 とりあえずは、体を元気に、風邪を引かないようにということをする子たち

は多いんですね。ただ、実際の現場のほうでは、そこから競技、アスリートを目指すかという、なかなかそこまで広がらないんですが、ただ、小さいころにそうやって水泳をやりながら、いろんなスポーツをやっているというのが今の傾向かなというふうに。

【知事】 アスリートを目指す人は本当に一握りだけど、ほぼ全員がスイミングスクールに通うでしょう。

【高橋】 そうですね。多いと思いますね。

【知事】 ほぼ全員ですよ。うちの子供、全部行ったもんね。二、三年は全員。

【高橋】 本当にそういう意味合いでは、すごく子供にもいいし、大人にもいいと思うんですね。

【知事】 なるほど。ありがとうございました。また後ほど。

じゃ、政田さん、どうぞ。言い足りなかったことをどうぞ。

【政田】 先ほど提案を幾つか上げさせてもらったんですけど、本当はいっぱいあるんですけど、一番大事なのって、僕は裏方をやっている人間なので、運営のほうにどうしても目が行ってしまうんですが、運営する上で一番大事なのって多分、ちょっと臭いかもしれないんですけど、「思い」だと思うんですね。「思い」がみんなスタッフとか関係者に伝播すれば、それってすごくいいものになっていくんだと思うんですね。

例えば、僕らの大会で領事館から来賓として来てくださった方の中で、もう任期が切れていたのに、僕らの大会に出たいがために帰国のタイミングをわざわざ延ばして、帰国の飛行機も遅らせて来てくださった方だとか、あとは、つくばに引っ越しているのに、わざわざボランティアで我々の大会に来てくれた方だとか、あとはスポンサーの方ですね。僕は面識のない方ばかりだったんですけど、飛び込みで行った僕に、資金サポートだけじゃなくて、ものすごい支えようとする熱い言葉をいっぱいくれるんですよ。目に見えない、みんなの熱量とか思いというのが蓄積されて、イベントとか大会ってそういうのが宿っているんだと思います。目に見えない、皆さん表舞台で活躍された方は多いと思うんですが、実は、そういうのが僕は一番運営する上で大切なんじゃないのかなと思っています。もちろん、愛知県の場合は大村知事がいらっしゃいますし、県庁の方も一生懸命やってくださると思うので大丈夫だと思うんですが、ご参考までというか、僕なりの意見です。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、イレーネさん。

【イレーネ】 少し政田さんに近い部分もあるんですが、先ほどは国際大会での英語の

部分が運営側でちょっと不安だという話もしましたが、やはり一番大事なのは、受ける側、応援する側でありますとか、お迎えする側というのが、どうしても国際大会になると構えている部分がすごくあるなというのを会場にいて感じる部分があります。さっきとちょっと矛盾するんですが、英語あるいは外国語なんかできなくたっていいわけですよ、スポーツがあるわけですから。そこに共通言語があるので、それは二の次だと思うんですが、そこは多分本当に大変なことになったら、何か通じると思うんです。でも、その前にやっぱり壁をつくってしまう。坂本さんも少しお話をさっきされていましたが、国民性なのかもしれませんし、少し構えてしまう部分が私たちはあるのかなと思ったりします。

でも、ウィメンズを走ったときに思ったのは、観客の走れなかったお父さんとかおじさま方が、国籍関係なく走っている人に頑張れと応援してくれているわけですよ。あれを見て、海外の参加者もやっぱり胸を熱くして、頑張ろうと笑顔で走っているのを見えていますから、市民のレベルで慣れていくといいますか、「外国の人が来た、わーっ」ではなくて、スポーツの参加者というように、ちょっとニュートラルな視点で見られるような教育というのは、1日でできることじゃありませんので、メディアとしての私の仕事だとも思いますし、何か時間をかけてみんなで成長していくシステムをつくれたらいいのになと思ったりはしますね。

【知事】 ありがとうございます。

それではまた、中村さん、追加で。

【中村】 先日、最終戦でグランパスと湘南の試合が瑞穂でありまして、引き分けでもJ1残留という状況で試合が行われたんですけども、日々私はファンを獲得するという仕事をしていまして、一生懸命いろんな選手を学校に連れていったり、イベントをやったり、いろんなことをしても、順位が優勝争いをしているときは観客が入ってくれるんですけども、下もない、上もないというときには観客席に結構空席が目立つような状況なんです。

この前の試合は、上ではないんですけども、下の下位争い、残留争いをしている、そういう状況でかなりメディアの方に注目していただきまして、いつもはチケットは招待券だとか配っても来てくれない状況なんですけれども、そのときは本当に何日も前からソールドアウトで、行きたいといっても行けない方が出てくるような現象が起きまして、僕らもすごく戸惑ったんですけども。愛知県の方というのは、そういう結構皆さんが注目するということにはすごいパワーが集まって、当日、瑞穂はかなりの、完全な満員状態で選

手はプレーできたんですけれども。

愛知県民の方というのは、そういう注目するイベントに関しましてはかなり力を注いでくれるというものを実感して、結果は本当に申し訳ない結果になったんですけれども、そういう愛知県民の方の気質というのはあると思うので、本当に肌で実感したので、こういうアジア競技大会だとか国際大会というものがきっかけでそういう方を取り込んで、長期的にスポーツのファンになっていただくという機会だと思うので、ぜひそのチャンスを物にできたらなと、グランパスもそれに協力できたらなと、日々の経験を考えていく上ですごく思いました。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、進藤さん、どうぞ。

【進藤】 先ほどお話しした中で、12月17日のラグビートップリーグの試合に小中高生にチケットを無料プレゼントしてという中で、どれだけ人が新しく来ていただけるんだろうというところに注目しているというのは、後でちゃんと評価をしていくべきだろうなというふうには思っているんですが。

2026年のアジア大会で考えると、いろんなスポーツの中で、例えば坂本先生のところの体操の選手がラグビーを見に来てくれるとか、ラグビーの選手が水泳を見に行くとか水球を見に行くというような、何か相互交流のような形で、愛知県さんに助けていただいて、そういうまずアスリートから相互交流する、それがお客様につながる。いろんなきっかけはあると思うんですけれども、何かこれをきっかけにということを考えていけたらなというふうに思っています。

その中で、さっき愛知、岐阜、三重のお話をしたのは、これはグランパスさんは豊田スタジアムでの試合運営に慣れていらっしゃるということはあるんですが、ラグビーはなかなかそこまで、何万人ということまで今までいっていないということもあって、これから勉強するところなんですけれども、そのときに地図を見ていると、名神だとか伊勢湾岸だとか東海北陸というところで、例えば鈴鹿にあるスポーツの杜鈴鹿ですか、オリンピックの何か水泳の競技の施設もあるようなところ、それから、関市のグリーン・フィールド中池だとか、そういったところは高速で行けるという関係もあるので、そういった施設を使った交流も含めて、愛三岐の観客が動くというような世界観ができればいいなというふうに思っております。ぜひ何かそういう2026に向けて、2019とか2020の世界大会が実

験場になるというような形で、常に私どもはサポートしてまいりますので、ご支援いただけたらなというふうに思います。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、邨瀬さん、いかがでしょうか。

【邨瀬】 ウィメンズマラソンの話をさせていただいた中で、今が完成形ではないんですね、やはり。あれはまだ進化を遂げている最中だと思っています。今後、そういった世界から、あるいは、この日本全国からお客様が、女性の方が集まるわけですから、それを使ってまた違うことができないだろうか。例えば、スポーツだけでなくファッションや、あるいはカルチャーとの融合ができないだろうか。せっかくですから、栄のまち、そのときだけランウェイをつくってファッションショーをやってもいいかもしれません。

また、スポーツということでは、スポーツコンベンション、例えばスポーツ医学の国際会議を開いたらどうだろうかとか、ちょうど阿久比に、スポーツ医・科学研究所という国を代表する研究施設があるわけですから、そういったところを使ってやっていったらどうだろうと。いろいろこれから発展させることができるんじゃないかなということで、ぜひ皆様方のお知恵も借りたいなというふうに思っております。

ちょっと1つだけ豊田国際体操に絡んで、1つ情報も含めてお話をさせていただきますと、体操界で1つ大きなニュースがありました。坂本先生はもうよくご存じだと思いますが、日本の体操協会の専務理事さん、渡辺さんという方なんですが、つい先月、国際体操連盟の会議がありまして、そこで国際体操連盟の会長に就任が決まりました。オリンピック競技の中で、今現在おそらく日本の方が国際競技連盟・I Fの長を務めるということは唯一じゃないかなと。現在ですよ、昔は卓球とかあったと思いますので。そういったことは国のスポーツ界全体にとっても非常に大きなこと。特に、採点競技である体操なんかは、技術委員会とかそういったものを牛耳るのがやはり会長さんですから、非常に大きな効果を発揮すると思います。そういった1つ1つのスポーツの新しい情報に神経を研ぎ澄ませて、これからアジア競技大会に向けて、この地域、10年のロードマップをつくる中の参考にしていけるといいのかなというふうに思っております。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

今言われたように、ウィメンズはまだこれからですよ。これからというか、もっともっと、と。皆さん一緒だと思うんだけど、僕の頭の中にあるのは、やっぱり東京マラソン

が、東京マラソンといいながら、東京お祭りみたいなものですからね、あれ。観光地を全部めぐって、ああいう形で何かまち全体が何か盛り上がるというのが、やっぱりある意味で求める姿かなというふうに思いますけどね。6,000人、7,000人のボランティアの方に来てもらってね。

【邨瀬】 名古屋は9,000人です。

【知事】 9,000人か。だから、そういった方たちに盛り上げていただいていますけど、もっともっと盛り上げられますよね。ただ、すごいエネルギーとかが要るかもしれませんけど。

【邨瀬】 1つ、「思い」ですよね。

【政田】 そのとおりだと思います。

【知事】 それも含めて、またぜひ進めていければと思いますが、いかがでしょうか。さらに何かご意見は。では、坂本さん、どうぞ。

【坂本】 やっぱり市民参加型というか、アジア競技大会が愛知で開催ということは、今言われたような、愛知を売り出すというか、愛知を知ってもらうことが大事だと思うんですよね。だから、市民の方が愛知を知ってもらうためにボランティアに参加したりして、市民の方が参加できる大会なんだよということが非常に、ボランティアでいろんな1つの競技大会に参加する、支援するというのも大事だと思うんですけれども、交通もある程度フリーパスみたいなものをつくって、いろんな大会を見て回るができるというようなことがあったりすると、体操を見に行きたいんだけど、空いた時間で水泳も柔道もラグビーも、いろんな競技を見て回るができるんだみたいな、フリーパスというのか、入場料は要るんでしょうけれども、交通だけでも循環バスみたいなものをつくって各競技場を回るとか。

関心があれば応援をすると思うので、やはりアジア競技大会を、中京大学の生徒に聞いたら、いつあるのかわからないみたいなこともありましたけど、やはり2026年に、10年後にアジアのオリンピックみたいなものが来るんだぞと。だから、県民を挙げて参加しようじゃないかみたいな、そういったことが大事なんじゃないかなというふうに思います。

だから、体操は選手がやるんですけど、体操の器具をちょっと見たり触ったりできるような機会とか、今もおっしゃったんですけど、水泳の試合が終わったら、みんなが水泳着を着てじゃぶんと中に入ってもいいよみたいな時間をつくったり、何かおもしろいなと思いましたけど。体操器具なんか普通触ったりできませんので、それをちょっと触ってみた

りする時間もありませんよとか、ラグビーだったですか、試合が終わったら出口のところで握手をしたりして観客の皆様をお見送りするみたいな、おもてなしの一環だよみたいな、そういったこともアジア競技大会では愛知はやるんだみたいな、そんなのはおもしろいかなというふうにちょっと今思いましたけどね。

【知事】 全くおっしゃるとおりだと思いますので、そういった面も含めてまたいろいろ、まだ10年ありますので、しっかり検討していきたいなというふうに思っております。ほかにいかがでございましょう。

【高橋】 確かに、やっぱり競技を実際その目で近くで見るとというのがとても大切なことだと思うんですが、ちょっと視点を変えて、私は6年前にマスターズという協会の理事に入ったときに、正直私は競技がメインですから、マスターズレベルの人たちの運営って、というふうな、ちょっと半信半疑なような、まだそこにはというのがあったんですね。

ただ、実際そこに入り出しまして、3年前から会長という立場をやらせてもらっているんですが、昨年、101歳になられたおばあちゃんが1,500メートル自由形を泳いで世界記録を出されたんですよ。世界記録といっても、泳いだ方はいらっしゃらないので、泳いだら世界記録なんです。でも、背泳ぎで、そのおばあちゃんは実は山口県在住なのに、わざわざ横浜のほうに試合に来られた。ただ、1人で来られないので、ご家族の次男の方が広島にいらっしゃって、山口まで迎えに行き電車に乗せて、新幹線でおばあちゃんが横浜に着いたら長男の方が迎えに来てということなんです。おそらくその年齢の方々と、まずそこまで行くことがおっくうになって、でも、やっぱり泳ぐのが好きなので。だから、そういうおばあちゃんとかを見ていると、80代、90代って全然まだ若いおばあちゃん、おじいちゃんというふうに僕には映るんです。

こういったいろんな国際大会を生で見るとか、いろんなファンを増やすというようなお話をさせてもらいましたが、やっぱりその施設の有効利用というのはぜひ本当に考えていただきたいなというふうには思うんですね。やっぱり体を動かすことによっては、健康というふうなことなんです。同時に、これから施設、例えば、大きなスタジアムというのは難しいのかもしれないけど、例えばいろんな競技が、アジア競技大会だとオリンピック種目より多いわけですから、例えば今、産官学連携とかあるわけなんです。私たちもスポーツ系の大学だし、いろんな企業でスポーツに力を入れている会社もあるわけですので、何かその辺でうまくコラボしながら、その施設を有効に整備していくというやり方があったりとか。

実は私、学生についても思うんですが、最近、体育学部の学生たちはみんな体育会に入っているかという、正直半分なんです、その世界を目指す子たちは。けど、スポーツは好きで、教えたいとか、ボランティアでという子たちも多いんですよ。だから、そういう子たちが、例えば子供たちや、あるいは学校の授業の課外活動や、年配の人たちを教えたいと思っている子たちがいっぱいいるんですが、なかなか教える場所が提供できないというのがあるんですね。

したがって、例えば大学でそういう何かアーチェリーとか弓道ができましたとかなんとかといったとき、あるいは、いろんな施設を使って、学生たちは指導できる能力があるものですから、うまくその辺も、こういった国際大会を通して子供たちに関心を集めるのもそうですし、プラスして、その施設をいかに有効に使うかというふうな手だてというの、長い目でやっぱり考えていっていただけると。

今、いろいろ子供たちの体力の問題とかありますよね、どうしても落ちてきている。実際、私たちの子供のころと比べると、当然のことながら外で遊んでいる子たちは少ないと思いますし、座ってゲームをやっている子たちが多いのかなど。落ちていくのは当然だと思います。やっぱりそこには、スポーツや体を動かす遊びというよりも、ゲームのほうが興味があるんでしょうね。だから、そこをこういった大会を通して、生で選手たちが泣いて喜んでいるという感動をやっぱり目の当たりにして、子供たちには特に強く感じてもらえる機会が提供していただければなというふうには強く思います。

【知事】 ありがとうございます。

邨瀬さん、いかがですか。

【邨瀬】 今の施設のお話もそうですけど、例えば中京大学さんですと、フィギュアスケートのリンク、あれはナショナルトレーニングセンターに認定されていますよね。だから、せっかく作るんだったらそういう形で有効活用していくというのが非常に重要だと思うんですね。これから10年のスパンで、アジア競技大会に向けて施設をもし造ったり、あるいは改装したりしたときに、使い方、利用の仕方っていろいろあると思うんです。例えば、NTCに認定されるだけで、年間の費用の何分の一かはそれで賄えるとか、そういうこともあるわけですから、何か違う視点を持ちながらやっていくと、いい形で連携できるんじゃないかと思いますね。

【知事】 ありがとうございます。

ほかにもいかがでございましょうか。

【政田】 先ほど坂本先生のおっしゃっていた市民参加型というのはすごくいいなと思っていて、体操ってなかなか、ごめんなさい、私にとってはあんまり身近なものじゃなかったんですが、もちろんテレビとかでは見ているんですね。ただ、1度だけ、ちょっとかじっていた人がやったのを見たことがあるんですよ。やっぱり圧倒されるんですね。子供たちのところに、できるかどうかわからないんですけど、例えば体操選手たちが学校に来て、体育の時間、1時間でもいいので見せたら、ものすごく刺激を受けると思うんですよ。彼ら、見た人たちがもしかしたらやるかもしれないし、それこそ大きくなったら、ボランティアや、体操をやりたいとか言ってくると思うので、そういうのも何か根づいていく活動の1つになるんじゃないかなと話を伺っていてちょっと思っていました。

【知事】 ありがとうございます。

ほかにいかがでございますか。よろしいでしょうか。

今日は活発なご意見をいただきましてありがとうございます。大変興味深く聞かせていただきました。また、今日いただいたご意見等々をしっかりと参考にさせていただければというように思っております。

そして、いろいろご意見をいただきまして、2026年、10年後にアジア競技大会ということでありまして、アジアの45カ国、地域が参加する40億人を超える地域の大会ですし、アジアのレベルはどんどん経済力も上がっているし、スポーツレベルもご案内のようにどんどん上がっております。何たって中国がおりますから、やっぱり日本と中国が戦うということになると、当然アジア競技大会なので、彼らもちろん必ず金メダルをとりに来ますので、ですから、そういう意味では、体操なんて、とにかくそれは世界レベルの戦いに当然なります。水泳もそうです。日本と中国と、そこにもしオーストラリアでも来たら、完全に世界大会ですよ。ですから、全ての種目がそういうレベルになるのではないかと思います。

日本でやるので、間違いなく盛り上がるというふうに思っておりますので、それに向けて10年、時間があるようで、ハードを造ろうと思ったら、やっぱりそれは1年、2年でできませんので、今からきちっと準備をしていくということかなと思っております。

ただ、あわせて、今国際大会が、オリンピックが代表的なんでしょうけど、やっぱり非常に大きくなって、はっきり言ってお金がかかり過ぎるので、我々はやっぱりできるだけ簡素で質素で合理的な、機能的な、そういう大会にしようということで、施設は基本的には今あるものをできるだけ活かしていくということで、日本国内でやっている国体だって

そうやってやっているわけですから、そういう意味では、機能的、合理的にやっということと。

例えば、どこかの種目で、体育館、競技場で選手の控室とか着替え室は新たに建物を造るんじゃないで、ちょっとテントでやらせてもらおうとか。テントだって今非常にいいですからね、全部冷暖房があるし。リオ・オリンピックもそうじゃなかったですか？ですから、そういったものを活用させていただくということでやっということと、これからしっかり詰めていっというと思います。

ただ、メインスタジアムと陸上競技の会場については、瑞穂のスタジアムは、これは名古屋さんが、あれは世界の競技ができないので、レーンが8レーンしかありませんから、9レーン要るので。スタジアムは全部屋根をつけないといけませんからね、今。あと、観客席も全然足りないで、2万人ちょっとしかないし、平椅子ですから、この際全部新設するということとあって、その追加分は県がやっという、そういう形で、瑞穂スタジアムは新設というのは決まっておりますけれども、あとはできるだけ、今あるものをどう活かしていくかという形でやっというように思っておりますし、それでもしっかり盛り上げていけるのではないかと一うふうに思います。

その間にさらに大会がたくさんありますので、何と一ういっても、まずは東京オリンピックをどう我々としてサポートしていけるかという一うことと、そこはしっかり応援できれば一ううふうに思います。

また、先ほどちょっとお話がありました、今、運動する子が少なくなってきた。それは確かにおっしやるように、二極分化しているんですね。愛知県、小学校、中学校の体育のいわゆる運動能力の体力測定をやると、小学校6年生男子は見事47位で女子が45位だった。大体そうです。東京から埼玉、愛知、大阪、兵庫、北海道と、この辺が大体大きいところは全部ペケで、平均でやるので、そうなっちゃうんですね。じゃ、愛知が全然あだめかという一うと、愛知はスポーツ王国ですよ。国体をやれば必ず3位になるんですね。開催県、東京、愛知と、大体そんな感じになっていまして。

やる子はやるんですね。だから、アスリートを目指してスポーツをどんどんやる子と全くやらない子が二極分化している一うので、これは、僕は教育委員会に、人それぞれ得手不得手がある一うので、みんながみんなスポーツ選手を目指す、そんな一うことはあり得ない一うんだけど、そうは一うたって、子供のころはやっぱり健康という一う意味でも、少しは走ったり泳いだり跳んだりすることぐらいいい一うんじゃないの、と、やれる範囲という一うか、その子の能力

に応じてということは言っているんですけどね。

ですから、全員、そういう意味では体力づくりとかいろんな健康づくりとか、そういったことでも、市民参加というのはやっぱり1つのキーワードだと思いますので、そういう点でも、また皆さんと一緒にしっかり盛り上げていきたいと思います。

最後に、とにかくこのスポーツは、いろんなジャンル、いろんなスポーツ競技がありますが、それぞれにやっぱりみんな夢を与えられる、感動を与えられるものだと思いますので、それぞれ今日は、それぞれの分野で一生懸命頑張っている皆様方にお越しをいただきました。愛知はそういう意味で、いろんなスポーツで、大体どれもこれも強いので、ぜひスポーツそれぞれのところで皆さんに頑張っていていただいて、それを総合的にコーディネートして全体を盛り上げていければありがたいなと。それが次の2020年の、オリンピックであり、2026年のアジア競技大会であり、また2027年のリニアにつながっていくというふうに思っていますので、ぜひまたしっかり盛り上げていければというふうに思っております。今日いただいたご意見をしっかりと受けとめて前に向けて進めていきたいと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —